

保育内容「環境」に於ける教材研究

その2

--『マー君の散歩道』をとりあげて--

○角尾 和子 栗原 泰子 野尻 裕子

(川 村 学 園 女 子 大 学)

1. はじめに

筆者は、学生が保育場面を具体的に正しく、想像する援けになるために「保育の記録」を大学での授業に取り入れることを模索してきた。このたび『マー君の散歩道』に出会い、学生との活動記録とその間の省察を述べることにした。

2. 保育の記録を学生の学びにとり入れる理由

- ① 学生が子どもを中心とする保育の話や、環境を通して学ぶ・学ばせると聴いても、なかなかその場の情景を想像することが難しいという実情がある。自分の授業を振り返っても抽象論で終わったり、あとは実践の場で学ばせようとするものになりがちである。保育の話は実践の場でするに越したことはないが、それはまた話の筋が偶発的に流れて効率的に進まない。一方で、具体的な（内容に適した）実践の記録を基に保育方法を理論化していくことも必要なことである。
- ② 現代は児童尊重の精神が広く承認されている一方で、子どもたちは商業主義や社会生活の激しい変動に曝されており、子ども産業とも呼ばれる玩具や催しの多くは子どもの興味を引こうと数々の手を用い、保護者も同調する状況は、正しく児童尊重の精神を伝えようとする者の寒心事である。子どもは自ら学ぼうとする存在であることを見え難くする。
- ③ 少子化の現象に伴って日常的に学生が子どもを大切に育てている實際を、見たり触れたりすることが困難である。また学生自身に幼児期の遊びの体験が少ないし、年齢に差のある遊び友だちとの遊びの経験も少ない。このような関係から、大人・保育者としての幼児への接し方が具体的には分からない者がいる。

以上のようなことを充たす保育の記録はなかなか得難い。筆者の経験による選択眼の他、学生の読後の感想を吟味することから、次に取り上げる方法が見つかることも多い。今回は第1回の記録・省察である。

3. 『マー君の散歩道』について

この本は発行された直後からテキストにしたら、学生に対して下記のような示唆が与えられるであろうと考えていた。

<適切と考える視点>

- a 環境を通して学ぶ（この場合は自然）幼児の具体的な姿を知るであろう。
- b 子ども（マー君）の質問の有りようは、真に自発的であり、好奇心に溢れている。ひとりの子どもの長期にわたる質問の実際を知るであろう。
- c （親友）の大人と会話する子どもの記録を読み込むことで、人への信頼の育ちや会話の過程で言葉の力が育つことなどを学であろう。

などが魅力であった。

しかし、本の内容は直接的には自然環境の中でのことであり、当時の担当教科にすぐ応用できずにいた。たまたま平成11年度、保育内容領域「環境」を複数の教員で担当するにあたり、教材の一部に取り上げた。その記録と省察をここに述べる。

これを教材とするのは今回が初めての実践であり、いくつか懸念したことがある。それは、①学生の住まいは東京、千葉、茨城、埼玉、その他で多く都市部に住む。そこで、②言葉に違和感はないか ③本の内容の重要な部分の、自然・中でも動物、小動物、植物は触れる機会が少ないものである。出来れば触れずに過ごしたいと考えていた学生も含まれる。④学生自身にこの本の全体を興味深く読ませたい。どのようにするか、等である。

もっともこれまでの経験から、筆者自身が身を入れて内容のすばらしさを説けば、学生は必ず関心を示すであろうとも考えてはいたが、①から④までのことを

配慮して下記のように、後学期に進めた。

講義・本の概略と、何が読み取れるか

散歩の筋道：P. 38-46を資料として一校時をかけて講義した。

課題・「初秋から晩秋にかけての部分」を丁寧に読む（第7章から第8章にかけて）

そこに出てくる動物、植物、自然事象について、図鑑、事典で丁寧に調べて記録する。絵もかく。この件（その1）と連動

・更に1冊全文を読んで感想を書き期末に提出する（課題提出までに期間をおいた）。

4. 課題に対する学生の反応について

自然物 動物・植物・その他の図鑑による研究は、一割の学生を除き皆大変熱心に課題を達成した。

方言による文章表現についての違和感は全くなかった。

マー君の言動から、年齢の違いを越えて親友であると誇示する、子どもの表現の巧みさ、面白さ等の報告もある。

動物・小動物に対してやや嫌悪感を持っていた学生の中に「これから少しずつ昆虫など嫌いなムシに馴れて手で触れるようになろうと思う」と言う者が出てくる。それが図鑑をあれこれ8冊も使用して課題を達成した後の感想であり、図鑑で知った知識だけではダメだということである。本を丹念に読ませようという魂胆はここまで発展したことは嬉しいことであった。

5. 学生の反応から読み取れること

この本の記録から更に下記のことを読みとることができる。

① 会話（Kとm）の進展がmの言葉その他の発達を支えている

具体的には、mにとってKは信頼する、敬愛する人間関係にあることから、mは自分が意図することをKに伝えられると信じている。Kもそれに応えている。

そこで意味のある会話が成立している。これはmにとってすばらしい学習のチャンスである。

② Kの発話の特徴から 子どもと話す時の要点を具体的に学べる。

子どもの能力の水準にあわせている。子どもの理解の様子を見計らい、その様子で先行する話や、語をパラフレーズしている部分がある。

③ 子どもの質問から学ぶものが多い。

従来から子どもの心の内側を探る意味から子どもの「質問」をとりあげている研究者は多い。しかしその多くは大勢の子どもの対象とした横断的な研究である。

ここには一例であるが縦断的な記録がある。今後の保育記録に期待したいことがらである。

④ 兄をmは自分の目標としている。

兄をよく観ており、「これは兄がしている、聞いてみよう」「兄のようになりたい」このmの気持ちは彼の成長の幅を広げる。

資料：『マー君の散歩道』桑原昭徳著 ミネルヴァ書房 1995)

6. 次年度の取り組みについて

学生の反応から、いくつかのことが明らかになった。

- (1) 保育内容は、その背景となる学問領域にもアプローチするような学習内容が必要である。
- (2) 学生が教師として保育をシュミレートできるような方法論を内在した授業内容を構成する必要がある。
- (3) 学生自身がその領域に興味を持ち、自分自身の好奇心や探究心を満足させるような自主的な学習過程が必要である。
- (4) 他領域や他の授業との関係やフィードバック過程により、既存の知識を再理解する機会が必要である。

以上のようなことから、次年度においては、次のような試みを行うこととした。

- ① 認知心理学の進歩に伴う、文字や数量や標識の認知に関する学習。
- ② ネイチャーゲームを取り入れ、学生自身が自分の身体を使って、自然に働きかけるようなフィールド学習。